

只見町の水辺林は未来への遺産

ニセアカシアの生態と管理

河川流域には、多種類の外来植物が自生しています。その多くは緑化のため上流域に導入された植物です。なかでもニセアカシア（ハリエンジュ）は、全国の河川に分布域を広げて大きな問題となつていきます。

ニセアカシアとは

ニセアカシアはマメ科の落葉高木で、原産地はアメリカ合衆国のアラバマ山脈周辺です。日本には二八七三年に持ち込まれ、街路樹や砂防樹、海岸防災林とし



▲ニセアカシアの花と葉

て広く植栽されました。河川上流域の荒地の緑化に利用され、ほとんどの都道府県で自然分布が確認されています。河川流域での分布を拡大し続け、河畔林の群落構造に大きな影響を与えただけでなく、河川管理、景観や生物多様性にも大きな影響を引き起こしています。そのため日本の侵略的外来種ワースト100に選定されています。

一方で、ニセアカシアは日本のハチミツ生産の重要な蜜源となっており、養蜂家にとつてはなくてはならない樹木です。只見町周辺では五月下旬から六月上旬にかけて白い花を咲かせます。この時期には、遠くからでもニセアカシアを確認することができます。

種子と発芽

ニセアカシアの種子は、硬い果皮で覆われています。種子には秋の散布後、すぐに発芽できる種子と、散布されても水を吸収

できず発芽しないで休眠する種子とがあります。休眠した種子は種皮が傷ついて、水を吸収できるようにになったときに発芽します。それまでは土壌中で何年間も休眠するのです。

ニセアカシアの種子は、河川の流水によつて上流から中下流へと運ばれます。とくに洪水によつて土砂と一緒運ばれた種子は、種皮に傷がついて水を吸収することが可能になり、土砂が堆積したところで発芽します。このためニセアカシアの種子は、季節に関わらず、洪水の直後に発芽します。

成長と根萌芽

ニセアカシアの成長は、非常に早く、発芽してから数年で開花結実します。10年間ほどは毎年1メートルほどの成長を示します。それと同時に、地下の根系を発達させます。地下の水平根は地表面近くを伸張します。この水平根からは、根萌芽を発生

します。この根萌芽が成長して幹となります。その結果、河川の中州や堤防際を優占して分布を拡大したために、河川管理においては伐採が行われてきました。しかし、ニセアカシアは伐採されると、水平根から大量



▲水平根でつながるニセアカシアの幹

の根萌芽を発生します。このような伐採管理がニセアカシアの拡大を助長してきました。ニセアカシアの根を掘っていくと、ほとんどの個体が水平根で周辺の個体とつながっていることがわかります。

繁殖特性

ニセアカシアは、種子による繁殖と根萌芽による繁殖を行います。原産地のアメリカでは森林火災によつて種子発芽や萌芽の発生が生じますが、日本では河川の洪水によつて種子が散布され、発芽が促進され、萌芽の発生へとつながります。ニセアカシアは繁殖に火と水を使い分け、世界中にその分布を拡大してきました。

伊南川における分布
ニセアカシアは只見町を流れる伊南川にも広く分布しています。上流域では、山腹の崩壊地に緑化樹として植栽されています。また、ロックシエッドおよびスノーシエッドの周辺、堤防や道路に沿つても植栽されています。伊南川と塩ノ岐川の合流地点の土砂置き場周辺には、樹高が20メートルもある林分が広がっています。

しかし、伊南川の上流域では中州に侵入しているものの、下流域の河川幅が広い中州にはほとんど分布せず、シロヤナギやユビソヤナギなどの在来樹種の河畔林が優占しています。この理由はわかっていませんが、伊南川でたびたび繰り返されてきた洪水と関係があるのではないかと考えられます。

今後、ニセアカシアが分布を拡大するかどうかはわかりませんが、河川生態系を変え、河川管理上、大きな問題を発生させる可能性があります。河川域からの除去を含めてニセアカシアの管理について検討することが必要です。